【学生によるESD支援活動】
奈良市立飛鳥小学校　親子燈花会　支援報告書

社会科教育専修３回生　奥田　玲央

１．日時　令和元年８月５日（月）

２．場所　奈良市立飛鳥小学校

３．参加者　奥田玲央、仲村幸奈、西條秀哉、山本健太、久保かのん、長滝谷幸子（学部生）
奈良市立飛鳥小学校　教員　約10名、児童　約120名、PTA　約10名
親子燈花会実行委員会　２名

４．活動報告

令和元年８月５日（月）、奈良市立飛鳥小学校で親子燈花会が開催された。支援の内容としては、子どもたちとともに燈花会のカップをグラウンドに並べ、先生方やPTAの方々による催しもののサポートを行うことを主とした。

ビンゴ大会を楽しむ子どもたち

今回の活動支援を通して感じたこと考えたことを、２つ挙げる。１つ目は保護者がいるからこそ学べた子どもへの関わり方、２つ目は子どもの楽しみを支える周りの連携についてである。

１つ目の保護者がいるからこそ学べた子どもへの接し方だが、保護者に見守られながら燈籠に火をつけ、並べる子どもたちが「見て、できた。」など自分の活動を保護者に見てほしいというアピールをしながら活動していた。保護者のいる場での子どもたちの認めてもらいたいという素直な欲求の表現を見ることができたのは貴重な機会だと感じた。このような子どもたちの些細な表現に我々支援者が気付き、子ども一人ひとりに適した接し方をすることが重要であると分かった。そのような接し方が、子どもたちにとって活動がより思い出に残るものになるということを理解して、支援していくことが必要であることを学んだ。保護者の方々がされていた「お母さんと一緒にしようか。」「お姉さんに聞いてやってみ。」といった声のかけ方を見て、子どもが動きやすい声のかけ方を学ぶことができた。自分たちが子どもたちと接するときの話し掛け方や支援の頻度の判断基準を理解するために自分たちで考えて行動することはもちろん大切だが、観察を通して理解することも大切なことの一つであると感じた。

２つ目の子どもの楽しみを支える周りの連携だが、今回の親子燈花会では催し物・出店・親子燈花会の準備のために我々奈良教育大学ユネスコクラブ員含め飛鳥小学校教員、PTA の方々、燈花会関係者、飛鳥小学校に関わりのあった教員など多くの人々が携わっていた。これだけ多くの人々が子どもたちに夏の思い出をプレゼントするという一つの大きな目標をもって、協力し合うことで今回の活動が成り立つということは、支援に関わらないとわからなかったことだと思う。今回の支援中に手持ち無沙汰になっている人がいなかったことから、今できることは何か、次は何が必要とされているかなど指示を待っているだけではなく視野を広げて考えて行動することが重要であり、支援者一人一人がそれを意識して動くことが円滑な運営につながることを改めて実感した。子どもたちの楽しみの裏側には多くの大人たちの連携と助け合いがあることを感じた支援であった。

今回の支援において感じた以上２点をこれからの大学生活や活動で生かしていくことはもちろん、生かすことができる活動を考えていきたい。